
占夢者人の夢～弐ノ巻・後編～

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

占夢者人の夢～式ノ巻・後編～

【NZコード】

N6477D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

雅樹の賭けに応じてしまった朔夜。雅樹が残した奇妙な暗号『F=K+N=24』と、『天使は全て知っている』のこの二つの言葉。陰陽師、叶の事故の下、朔夜がこの謎に挑む。悪夢と、雅樹の介入。そして、新たなる真実は？ネットから始まる、全ての事実がここで明らかに！

全てが謎に包まれたまま、今の都住朔夜を支配していたのはこれから身の振り方であった。

先程迄の事を振り返り何をすべきなのか……まず反省すべき点は茫然とした朔夜の判断が堵けを承諾してしまったと云う事である。今更ながらに何故何も云い返せなかつたのか?これから始まる、雅樹との賭け。

しかしだからといって事件が引き起こされる事になる訳にいかない。それが、雅樹にとって何を目的しているかは図り知れないが……。だけどこれこそが最優先しなければならないと理解した時、この後直ぐさま行動に出た事は図らずしも間違つていないと、そう納得できた。

朔夜は朧げながらにも想い出せる事を想い返していた。

キーワードは、『天使は全てを知っている』

これは、自殺と、自殺未遂の現場に残されていた言葉である事は今迄の情報で分かつてはいるものの、それ以外の共通する項目は皆無。

そして、云い残された『F=KN=24』[これらの一つの言葉だけ]である。

ここから導き出される答えは一体何であろうか?全く想い当たる点は何一つない。全くのゼロからのスタートなのである。そして、今日を含め三日間。朔夜が勝てると言つ見込みは今の所全くゼロに等しかつた。

「……何やて?」

叶は、興味深く朔夜の言葉を聞いていたが、一度確かめるかのようにそう宣つた。

「今話した事が、全てですよ」

今の時点の朔夜は、結局一人で考えていてもどうにも前に進まいと考え、眠りに就いていた叶を叩き起こそうと想い病室に戻った所、既に目を醒ました叶がベッドであぐびをしていた矢先であった。そこで、朔夜はそのままの事情を話したのである。

「まさか……あのマサキがかあ……うーん。念の入った女装。恐るべしや……そっちでもいける口か？」

「冗談はさておき、想い当たる事など何一つなく、接した事がほとんどと云つて無い事は、敵を知らないのと同じと判断すべきであった。

「やけど、今回の全ての事件が陰陽師絡みとなれば、これは俺も参加せん事には拉致あかんなあ」

叶は、左手で顎を掴むかのような仕種で考え方をしていた。

「真の陰陽師は、式神や呪術の類いが使えるし、俺には出来んが、夢さえも操る事ができるってのが相場や……朔夜、お前だけでこれを解決するつちゅうのは無謀やわ」

確かに、叶の力は必要不可欠になつて来ていた。

「そこで、叶には遠隔調査をしてもらいたいのですよ」

「うして、簡単に叶に頼みたい事柄を朔夜の口から述べる事になる。

それを聴き、事の次第を受け止めると、

「なるほどな……敵さんは、下北沢を中心に事件を起してとる。そこで俺が、その下北沢に式神を放ち、事の次第を少しでも把握するちゅうこつぢやな……分かつたわ。それなら、その鞄取つてな」

叶は、朔夜から渡されたその鞄の中からいつも持ち運んでいる自らの式神の札を読み上げると、自由の効く足でベッドを離れた。

「琴音！今から、下北沢のに護衛につけ！」

窓を開け、解き放つと、1羽の白い鳩となり羽ばたいていく。琴音は、叶が一番大切にしている式神である。でも、朔夜には只の鳩にしか見えないのだが。

「まあ、後は敵さんが下北沢に結界を張つて無い事を祈るしか無いわ……しかし、呪術を使うとなると、それなりの覚悟がなきや、逆凧を食らう事になる。向こうさんもそこそこ分かつてやつとの節もあるやろし……天に祈るしかなかろ?」

「逆凧……ですか?」

「そう。術つちゅうもんは、かけた当事者に跳ね返つてくるもんなんや……やから、それぞれ陰陽師と云つもんは、それに対する対策を考えとるもんや」

「叶もですか?」

「当然やろ。でも、それが何かと云つのは、例え朔夜であつても教えられんわな……」

術者にとって、命に関わる事。だからそれがなんであるのかは、たとえ近しきものであつても口外する訳には行かないものある。

「後は、妙ちきりんな暗号やな……」

『F = K N = 24』

そこで朔夜の手帳に今書き込まれた文字の羅列を見ながら考えに入る。

「住所の暗号か何かか?ほら!住宅地図とかにこいつこいつの書いてあるやん?」

叶は、テンション高く話しを進める。じつこいつ探偵気取りな所が子供じみて笑える。

「あり得そうですが、そう云つ事では無によつに想えるのですよ。まん中のKノブがポイントですね」

地図案内に一つ記号が連なる事は無い。

「三つ記号か……あり大抵にいくと、イニシャルが妥当やなあ」

雅樹が云う、ハンデと云つ名のもとに、ヒントと曰されたそれは、非情に簡単なものであるのかも知れない。

「イニシャル……あり得ますね。しかし、KNなんてイニシャルの人があるが下此沢に一体どれだけいるのでしょうか?……?」

気が遠くなるほどの人数であろう。それに、調べるにしても、電

話帳や住宅地図をあてにする事も出来やしない。とにかく東京の人入れ代わりは激しい。

「ならFと24は? 何かの付け加えとちやうか?」

「付け加えですか?」

「24……番地か?」

依然として、住所にこだわる叶。

「……24……いえ、年齢かもしませんね?」

ふと、朔夜の頭を過ぎる数字。確か、神楽は24歳では無かつたか? そこで、ハツと気がついた。

「これは、神楽さんを守れるのか? という事なのかも知れません……いや、実際、神楽さんと云う訳では無く、標的を同じ女性に見立てて僕を試しているのかも知れませんよ……」

姉、神楽との事も大目に見てやる

突如、あの時云つた雅樹の一言が気に掛かった。

結局は、雅樹の神楽に対する何かがそうさせているのかも知れない?

「どういつこつちや?」

独り納得している朔夜の表情を不思議そうに見ていた叶であったが、

「叶、判かりましたよ。このFはFEMININE。つまり、女性の……と言う略語なんですよ」

何が気に食わなくて、事件まで起し、朔夜にこんな賭けを持ち掛けたかは判らないが、女性のイニシャルKで、24歳をターゲットにしていると云う事なのだと理解した。これで少し的を絞る事が出来た気がした。

後は、『天使は全て知っている』という言葉のみである。

「何か拍子抜けしたなあ~あっさり解いちまうなんて……」

叶にしてみれば、莫迦にされている感がある。こうやって解いて

みれば子供でも解けそうな暗号であった。

「ハンデと云つただけに、思い返してみれば簡単なのが当たり前の
のですよ。しかし、下北沢の住人を調べるのは一苦労ですね……ネ
ットを利用してみるしか方法が有りませんよ」

すると、

「不当アクセスでもするつもりかいな……」

「こういう時、利用出来るものはとことん利用してみるのも良しと
しませんか?」

つまりは、ネットで不当にアクセスしてハッカーとなり、個人情
報を保持している企業から住所録を調べあげると云う事である。こ
んな事は、法律上に問題が有る事は知っている。

「はいはい、つくづく敵に回したく無い奴やなあ～でも気張りいや
?あてが有るだけつけもんなんやさかい。式神の方も結界が有る
訳で無く取り敢えず琴音も無事下北沢に入れたようやから安心せえ
や?」

今入った情報だとでも云つかのように叶は朔夜には見えない遠く
の方を見据えて云つた。きっと叶にはその状況を透視できるのであ
る。」

「そうですね。では、また何かあつたら連絡しますよ。実際、自由
に叶が動けるのであれば、もっと効率良く事が進むのですがね?」

そういうと、朔夜は椅子から立ち上り軽く手を振つて病室から立
ち去つたのである。

「この三日間は、寝る事も出来ませんね……」

朔夜は覚悟を決めたかのように独り言を云いながら病院を後にし
た。

#1 F=KN=24（後書き）

式ノ巻・後編始動です。

ミステリーから始まり、サスペンスから、ちょっとだけオカルト。と云つた感じです。宜しければ最後までお付き合い頂けると嬉しいです。

#2 天使

天使

自宅に戻った朔夜は、早速時期外れの万年コタツに座り込むと、とるものもとらずネットに集中した。

慣れた手付きで不当アケセスし、進入したあらゆる企業の情報から、この下北沢に住む二十四歳女性のイニシャルKNにあたるもの全て余す事なくピックアップする。

そして、その情報をプリントアウトしてファイリングして行った。しかし、それでも五十件近くのリストがあり、どれが雅樹の云うターゲットになるのか、全く予測がつかなかつた。

「これでは、どうしようも有りませんね……」

五十件全てに対しても、たつた一つの身に対して接する機会など無い。ましてや、働いている女性だつて数知れない。

「何か良い方法は無いですかね……」

暫く考えていた朔夜ではあつたが、ふと想いたつたかのように検索を始めた。

『天使』

と言う単語で、ホームページが引っ掛けられてこないかと想いたつたからである。

すると、五十件近く引っ掛けつて來た。

『天使の誓い』

『天使の楽園』

『天使のわだかまり』

他多数。

それらのサイトを見て回つたが、しかし、『ピン』と来る内容の

物は無かつた。

それにしても、こうたくさんの中の天使に関するホームページが有るとなると、まんざら人は天使を軽視していない。そして惹かれると言つては神からのメッセージとして人間に伝える役割を担つてゐると言つのが原則で有ると云う事だつた。

特別、キリスト教を学んでゐる訳でも無く、こう云つた類いの事を身近に感じる事のなかつた朔夜にとつては全く未知数の多い分野だと云つて過一言では無く、こうやってホームページに載せられてゐる、より詳しい項目を読んで行くうちに次第に飲み込んだ気がした。

だけど、実際聖書やそれに付随した書物に載せられている天使像と云うものは、確かに人々の心に、魅力有るものとして映るのかも知れない。

この時代、神も仏も無いもんだと云われるが、人は、何かに縋つて生きなければ、生きていけないとかも知れないとそう感じた。

確かに、天使が現れる夢は存在する。夢を見た人の良心や真心を代弁し、苦境からの脱出方法を導いてくれるといった類いがそうだ。このような状況下、天使が夢のなかに現れて神からの言葉を残して行くと云う所が気に掛かつた。もし、自らを『天使』だとそう云い放つた雅樹が、人々の夢の中で、人道に反する事を囁いたとしたらどうであろう?人はそれを一つの啓示だと信じてしまったとしたならば……

そう考へると今迄の事存についても納得が行く。夢占いに関しても、源流は神の御言葉を聞く為の物としてとらえられている。

面白半分にそうしたのか?それとも何かの考へがあつてそうしたのか?

しかし理由が何にしろ、黙つて見過ごす事などは出来ない。そう考えて、朔夜は焦つた。

次のターゲットは誰なのか？

そんな事を考えている中、一通のメールが飛び込んで来たのである。

全く身に覚えの無いメールアドレス。

しかし不吉なのは、そのアドレスのアカウントは横文字で、

『堕落した天使ルシファー』

朔夜はこれを見た瞬間、ルシファーがどういうものであるのかも分からずに、即座にそのメールを開いたのである。

それには件名は載っていなかった。そして内容を読みはじめる。

そして、出だしは紛れも無く探していた『天使は全て知っている』であった。

『仕事ははかどっているかい？天使は悪にも、善にもなり得る。そして人はそのどちらを選択しようとその者自身の心で捕らえる事ができる。ならば、悪に身を滅ぼそうとそれはその人の勝手だとは想わないかい？すでに、下北沢に式神が飛び交っているようだが、それは無意味と云うもの。オレの心は、もう決まっている。それでも止めようと思つていてるのならば、ここにアクセスしてみると良い…』

…
それだけ書かれたメールをアドレスそのままに送り返そうと試みたが、既にアドレスを変えたらしく戻つて来た。雅樹には全てお見通しなのであるうか？

このメールが、賭けの張本人。雅樹から送られて來た事は明白ではあったが、朔夜は仕方なく書かれてある通りに、そのアクセス先のホームページを覗いてみる事にした。

長たらしいそのアクセス先のアドレスは裏ホームページであるらしく、無気味にも真っ黒な壁紙に赤い文字で作られたホームページだった。

中心には、真っ黒な羽根に『DEATH』と書かれてある。そして、タイトルは、紛れもなく探していた『天使は全て知っている』であった。

心の闇

無気味なそのホームページにある掲示板は、憎しみ、怒り、悲しみがシラツラと書き記されており、最初、掲示板の書き込みを見た瞬間、朔夜はその内容を読むのが躊躇われ頭がクラクラした。人とは、こんな所で全てをぶちまける事ができるのであろうか？誰にも言えず悩み、怒りのぶつける場所も無く、ネットを頼つて書き記された内容。見ていて気分を害してしまった。

確かに、今流行りの出会い系サイトや、自殺願望のサイトがあり、噂には事件として取り上げられていると聞いてはいたが、実際こういう所に入つてみると、こんなにも人の心は荒れすさんでしまうものだとは、想つてもいなかつたのである。

「ネットも考えもんですね……」

今や、どこの家庭でも、気軽にネットを楽しむ事はできる。しかし、こういうページがあつて良いものであろうか？そんな事はあってはならないのでは無からうかと、溜め息をつきながらそう想つた。しかし、だからと云つて落胆ばかりしている暇は無い。いち早くこの中から標的となり得る人物を見つけ出さなければならない。

一件ずつ書き込みをチェックして行く。すると、簡単にイニシャルに該当する人物らしき者の書き込みを発見した。その人物のHNは中島清美。その内容は次のようないふな物であった。

「今朝、天使様は私の前に現れた。全てを消化するにはあの人を地獄に突き落とすしかないと……今夜私はそれを決行することにする

短い文面で、『あの人』とは誰か判らないそんな書き込み。それは今朝書き込まれたものだと判明した。すると直ぐさま朔夜は過去

の書き込みを見て回つた。それらは決まって朝と夜に書き込みされている。つまり、『決行』と云つてはいる今夜迄にもう一度ここに書き込みをする可能性があると言つてある。いや、そうあって欲しいと、朔夜は願つた。もしかすると、その『決行』を阻止出来るかも知れないとそう想つたからである。

そこで、一つの賭けに出た。今は、夕方。これから先も次々と増えて行く書き込みの中、果たして気がついてもらえるか？そんな賭けに……

#4 交換殺人

交換殺人

この掲示板は、レス仕様にはなってなく、一方的に書き込んで行く者が多い。その中で、朔夜がこのメッセージを残すのは異様かも知れないと想つた。しかしだからこそ、こうする事で目に止まってくれる事が一番の得策だと想いたつたのである。

それは、次のように書いた。

「天使の云つた事とははどの様な事なのでしょうか？もし良ろしければ僕にも参加させて頂けないでしょうか？交換条件にて」

そんな書き込みをした後、朔夜は中島清美なる者との接点を見い出そうと考へた。まず引っ掛かってもらわないとしようがない。そういう為に何かをしなくてはならない。そのような中、時間が許す限りの書き込みを行つた。掲示板は何度もアクセスしてないと次から次に新しく書き込みが行われ、自らの書き込み内容が消えて行く。その上変更が判らない。

それを見越しながら時間を置いてはアクセスして行つた。

時間が刻々と過ぎて行く。流石の朔夜も落ち着いてはいられなかつた。これが、雅樹との賭けだからというのではなく、今となつては、一つの事件を解決する者であるならばと云う想いの方が強かつたからかも知れない。

そんな時、携帯の着信音が鳴つた。

「もしもし……朔夜さんですか？」

それは今度こそ紛れもなく、昼間連絡が取れなかつた神楽からのものであつた。朔夜は複雑な思いを秘めながらこの声に安堵を覚えた。

「神楽さんですか……今日はどうなさったのです？」

「すみません。それが、わたくしにも何がどうしたのか分からなくて……今朝家を出ようとしていた所迄は覚えているのですがその後の記憶がないのです。気付いたら、ベッドの中で……」

記憶の抹消を雅樹が行つたかも知れないと朔夜は想つたが、

「ひらは気にしておりませんよ。それより、気になりますね……記憶がないとなると……」

事態はだいたい掴める。だけど、それを神楽に悟られるといれだけ悲しい想いをさせてしまいかと考へた朔夜は、なるべく話題を逸らせなければと思った。

「今日は、ゆっくり休んだ方が良いかも知れませんね。また体調が良い時にでもゆっくりお話ししましょう……あ、お母さん今日は気分が良さそうでしたよ。早く良くなれば良いですね」

「お見舞いして頂いたのに、本当に申し訳ありません。そうですね、今日の所はお言葉に甘えさせて頂きそうをせて頂きます……あの……あ、いえ何でもありません……」

一瞬何かを云いかけようとしたが、神楽はそれを否定するかのように言葉を切つた。それが何であるのか気にはなつたが、自分から話さないのならと朔夜は問い合わせなかつた。

しかしこの時、聞いていたなら事の事態はもっと良かつたかも知れない。やつ、この時隠した神楽の言葦はこの後の全てを担つていたのである。

そして時間はまた刻々と過ぎ去つて行く。夕飯をとり摂り、敢えず緊張感を解いたそんな時、あの裏ホームページを覗いてみた。時はもう夜と云つて良い時間になつていた。

すると、そこには待つていた自分宛の書き込みがあつた。一か八かの賭けは成功したのである。

「文換とはじつ云つた事でしょ？具体的に聞いてみたいです。このホームページのチャットで待つてます」

簡潔に書かれた書き込みに、チャットの指示があった。その通り
朔夜はチャットルームへと足を延ばした。基本酌にチャットは覗こ
うと思えば誰でも覗ける。しかし、このページは上手くプログラム
を作っているらしく、その相手にしか覗けない。そこで、部屋に入
っている人のHNを選びだし指定して朔夜はその相手、中島清美へ
とメッセージを率直に打ち込んだのである。

「『決行』とはもしかして殺人ですか？」
「そうです」
「ならば取り引きしませんか？僕と」
「取り引き？」
「交換殺人です」
「あなたも誰か殺したい人がいるの？」
「そうです」
「誰？そしてそのメリットは？」
「誰とはここでは詳しく云えません。邪魔な人を消す事。メリット
は、警察に疑われない事」
「なら私、もそう。疑われないと言う保証はある？」
「ここでの事は、プログラムのため警察に知られないでしよう？そ
れに僕とあなたは基本的に面識がない。あなたは下北沢に関係があ
る人ですね？」
「良く分かったわね……あなたは誰？」
「僕も下北沢に関係がある者なのですよ。どうです？話にのりませ
んか？」
「判つたわ。で、どうするつもり？」

ここ迄話を進めて、朔夜は戸惑つた。交換殺人を考えた迄は良い。
自分がその人物を殺さないで、この中島清美と名乗る者を殺人者に
しなければ良い訳だから……しかし、自分が殺したい相手はいない

のだ。そこで考えた末、

「秋元総合病院を御存知ですか？」

「ええ。知っているわ。私が勤めている病院よ」

「そうですか奇遇ですね。その202号室に入院している塚原叶と言つ人物を殺して欲しいんですよ」

叶なら事の次第を飲み込んでくれるだらうと想い咄嗟に申し訳ないとは想いつつ、そう書き込む。しかし、余りにも偶然である。勤め先がかぶるとは……これも、雅樹のシナリオの内なのか？

「そう、分かったわ……都合良く私が殺したい相手も秋元病院の関係者よ。こちらも全てを明かすわ。殺したい相手の名前は、沼淵佳子。看護師よ」

「ならば、その相手の住所を教えていただけませんか？今夜の『決行』を確実に行います」

「判つたわ。住所は……」

じつして、二人の間の密談は終わった。
住所は、下北沢の南の方で先にファイリングしておいたデータの中にもその住所が載つていて。

つまり朔夜の範疇にある訳である。しかし、当の相手は今日は準夜勤で夜中の帰宅になるらしい。後は、叶に連絡しなくてはならない。中島清美は明日、病院の薬物を用いて叶を殺す算段を立てた。これは、医療関係者ならば誰であつても簡単になし得る。主治医となればいとも簡単に。

しかし、一つの要求があつた。沼淵佳子の死を確認できて初めてこの話はなし得るのだと云う事だつた。

偽証

「…と云つ事なんですよ」

全ての事の成りゆきを、病院のナースステーションに繋いでもらい朔夜は叶に電話で話して聴かせた。

「そんな事になつたんかい……」いつもうかつがけへんなあ……しかし、俺らマサキの手の平の上で踊られてとるみたいやなあ～」事の重大さに、気遅れしている風は見られないが、叶自身緊張感は持つてゐるみたいである。

「しかし、よお、俺を殺してくれなんて思い付いたもんやなあ～上出来つちやあ上出きやが、ホンマは本心とちやうか?」

茶化したように受話器の先で笑つて云つているが、叶の性格から考えると怒つてゐるかも知れない。

朔夜はそれをこまかしながら、

「叶は、殺しても死はないタイプですからね～」

和やかに話しの腰を折る。心配していない訳ではない。ただ、叶なら大丈夫だと信じてゐるのである。

「で、どうするつもりや? その、沼淵佳子を……中島清美はこの病院の関係者だと分かつた訳やし的は絞られた。HNのイニシャルKNの人物であつても、本名もKNである可能性がある訳とはちやうやろ?」

「一日だけ沼淵佳子さんに病院の勤務を理由を話して休んでもらおうかと想つてます。無断欠勤なら、相手を油断させる事ができるかも知れませんからね……」

「酷やな……突然殺されるかも知れません。なんて云つて信じてもられるとは想えんな～誰やつて頭おかしい想われるわ」

「それもそうですね……でも、何とか説得して分かつてもらわない

と困るんですよ。別に、中島清美が誰なのかを追求する訳ではなく、この先この危うい関係を保つて行く事ができるかどうかの瀬戸際なのだと僕は想うのです

悲劇がこれで終わるのか？この先雅樹とのもう一つの賭けは存在している。何かの過ちでそれを犯す訳には行かない。

「決心は固いようやな。なら、好きなようにやれや。こっちは止めへん

こうして、明日迄の算段を一人が立てた後、静かに携帯の音は途切れだ。

朔夜は、沼淵佳子の勤務時間終了を待ちアパートを出た。真夏の深夜だと云うのに入通りが少ない。そろそろお盆の時期だからかも知れないなと想つた。気温も丁度良く、昼みたいに不快指数は感じられない。

沼淵佳子の白宅は、一戸建ての家で、その家の前は密集した人家と店が立ち並び、意外とひつそりと隠れる場所もある。待ち伏せるのは容易であった。

時々静かな街灯の下を歩いてくる足音が聞こえてくるとその方に目を配る。しかし、どれも沼淵桂子らしい人物ではなかつた。

満月の下、朔夜は一度睡魔に襲われかけたが、何とか意識を取り戻す。今寝る訳には行かない。三日間の過酷な試練が待つている。そう想うと逆に目が冴えてきた。そんな折、一台のタクシーからお

りる人影が目に入った。待っていた沼淵佳子が現れたのである。

「沼淵佳子さんですね？」

穏やかな口調で警戒心をなるべくおこされないよう、自宅に入る為の門をぐるりとした沼淵桂子に、朔夜は声を掛けた。

「ええ、そうですが……」

しかし、想つた通りの反応。訝しげな目で朔夜を見た。

「こんな事を云うのは変だと思われるのですが、貴女は、誰かに恨

みを買つているよつです。もし良ければ僕の話を聴いて頂けませんか？」

なるべく、慎重に話を進める。決して、殺される事になつてゐるなどとは云えない。

「……あの……何故そんな事を見ず知らずのあなたに云われなければならぬのですか？面識もないのに……それとも何処かの探偵さんですか？」

少し怒つたような表情で朔夜を見る。

「あ、申し遅れました。僕はこいつら者です」

そこで、名刺を見せる。

「夢占い？都住朔夜さん……あ、夢関係の本を出版されているあの都住さんですか！」

「ここでも、何とか理解してくれた人がいてくれた事に感謝した。

「でも、その都住さんが何故そんな事を？」

「実は……」

今日あつた事を簡潔に話して聞かせる為には、骨が折れる気分だつた。ただ、賭けの事だけは避けておく。それは自分自身の問題であり、沼淵佳子には全く関係のない事であるから。

「お話の内容は分かりました。で、私はどうすればよろしいのでしようか？」

一通り話した後、朔夜がその為の対策を話さうとした時、一陣の風が巻き起つたのである。

「！」

まるで、小型の竜巻きが一人のいる方に向つて斬り付けるかの勢いで巻き起つたのだ。

「残念だつたね、都住朔夜！」

頭上から声が聞こえて来たのに気付き、辺りを見回した。するといつの間にはびこつたのか、辺りの樹木がうねるかのように朔夜達

を取り巻いていたのである。

「ヒントは簡単だつただろ？でも、この賭けを切り抜けるのはここからが大変なんだよ！」

はす向かいの四階建てアパートの屋上に月の光の下動く人影が見えた。どうやらセレニティらしい。そしてその声は紛れもなく、

「雅樹か！」

「気軽に、ファーストネームで呼ばないで欲しいな！……胸くそ悪い！」

すると雅樹は片手を振り上げ、振り下ろす。

まるで剃刀の刃のような風を樹木達を操る事でまき散らしてくる。それを、朔夜は沼淵佳子の前で身を呈して受け止める。その為、夏着の薄い服が裂かれ、至る所に傷が出来、血が滲み出してくる。

「痛～！」

「今のは手加減したからね……次はこうはいかない！」

手の平から青白いオーラが見える。朔夜はそれを初めて見た。そしてこれからきっと式神を出すのだと想つた瞬間、それ目掛けてオレンジの光線が飛び込んで来た。それは、青白いオーラを消し去るかのような勢いで、包み込むと一気に分散した。

「何！」

雅樹の物とは違つ、一つの光。それが、叶の式神である事はもう疑う事はない。式神を見た事はないが、下北沢の護衛に飛び立った琴音。それ、であるのだと。

暫くすると、ヒラヒラと焼けこげた紙切れが舞い落ちてくる。それを手の平で受け止めると、朔夜は握りしめた。そしてズボンのボケットの中に仕舞い込む。

「小賢しい！ネズミがウロチョロ口してるとはな……都住朔夜！」

「一人で何でもできると思つている方が驕つてているのではないのか！」

「ちつー下らん論争はいいーこのままねじ伏せるまでだ！」

朔夜の言葉に一気に頭に血が上ったのか、

「翔！開眼！」

雅樹は印を結び突如マンションから飛び下りると、樹木がゾロゾロとその着地地点に集まりクッシュション代わりのように雅樹を受け止める。そして躊躇いもなくうねる樹木を引き連れスタスターとこちらにやってくる。

その様子を隠れて見ていたのであらう、沼淵佳子は、ガタガタ唇を震わせながらその場に立ち尽くしていた。朔夜は、その前に立ち塞がるようにしつかりと身体を盾にしている。

全身の開いた傷口がズキズキと疼く。そんな朔夜の前にしたり顔で雅樹に立ちはだかつた。

「どけ！」

右手で払い除けるように朔夜の肩を叩いた。

「まさか……そんな事する訳ないでしょ？」

「冗談じゃないと、雅樹を睨み付ける。

その利那、『ドス！』

鈍い痛みが一発、朔夜の鳩尾に送り込まれ、前のめりに身体が崩れ落ちる。意識が飛ぶと同時に地面が顔に触れた。

「偉そうな口を叩く前に、護身術でも学んでおくべきだったな……アハハハハ！」

甲高い笑い声の中、意識が遠退のいて行く。何とか雅樹の足首を掴んだ時、沼淵佳子の絶叫がこの街全体に響いた。

朔夜が最後に目に映し撮つたのは、真っ赤な血で染まつた世界であつた。

#6 不快

不快

先程から、バタバタとけたたましい物音が耳障りでならない。不愉快な現状を腕を持ち上げ眩しい光をこらしてみると、掌で目を覆うようにしてた時に気が付いた。おびただしい迄の血液。それが掌にびっしりと塗り込められていた。そしてそれが意識を取り戻した朔夜の現状であった。

「……どこでしじう？」「ここは……」

「朔夜！」

遠くで慣れ親しんだ声が聴こえてくる。朔夜の周りでパタパタと看護師達がガーゼやら包帯やらを取り出し手当てしている。その中で身を捻らせ、朔夜は声の方を向いた。

「大丈夫なんか？お前……」

「叶？ここはどこなんですか？」

「見たら分かるやろ。病院や病院！」

「何故僕が病院に？」

確かに、沼淵佳子と一緒にいて雅樹と出くわし……

「沼淵桂子さんは？」

朔夜はゆっくりと考えながら、そして叫んだ。血の気が引いて行くのが分かる。最後の断末魔。

それが今、確かに朔夜の耳に蘇つた。

「すみませんね……事情聴取とらせて頂いて結構ですか？都住朔夜さん」

朔夜の意識が回復したのをきっかけにしたのか、壁に寄り添つていた一人の眼鏡を掛けたエリートサラリーマンのような風体の男が話し掛けて来た。

「どなたですか？」

見た事もない……いや、でも何処かで会つてゐるよつな……

「君たち、席外してもらえないか？」

その男は、朔夜を取り囲んでいた他の者達をドアの外に出るよう促す。ついでに、もう意識も回復したのだからと、医師達も遠ざけた。それを確認したところでその男は眼鏡を外し、はにかみながら微笑んだのである。

「久し振りだな。都住」

その笑い方でハッと気がついたのである。

「あ……もしかして、城戸直紀君……」

あまりにも惚けた顔に、叶が、

「そうそう。思い出したか？高校で同じクラスやつた直紀や。今は、広域捜査官の警部やと」

直紀の肩を気軽に叩きながら付け加えるように朔夜に云つ。

「その年齢で警部……エリート街道まつしぐらなんですね……」

と、のんきに話していくたいが、直紀は事の次第を率直に朔夜に聞いた。

「沼淵佳子とはどう云う関係だったんだ？まあ、お前に限つて殺しをやるとは思えない。それにあれば、人間技とは思えないが……」
その言葉で、朔夜は想い出したくもない光景が頭を過つた。しかし、これを警察に話したところで信じてはもらえないであろう。いや、直紀なら判るかも知れないが、だからそうだと云つてその他の警察官が納得するはずなどない。朔夜は黙つて叶を見た。

「俺らの事理解しとる直紀には正直に話しといた方がええんじちやうか？」

叶は、溜め息をつきながらただそれだけ口にした。

「判りました」

そこで、直紀に全てを話して聽かせた。

賭けの事。ホームページの事。沼淵佳子の事。そして、この病院でこれから叶に降り掛かるかも知れない事。全てを……
こうして全てを聞き終え、静まり返つた直紀が発した一言は、

「阿呆」

まずは、その一言だった。

「まあここに、あの腐れ縁の塚原と一緒にいるんだからそれくらい分かりそうなものかも知れんが……もつと頭を使え。実践の戦力ならいくらでも俺が貸すだろうが……と云つても、相手が陰陽師とあつては、俺達がどうこう出来る訳ではないが、これから先の刑法に立証ができるかも知れないだろ？が！そこ迄云わなければお前達は判らないのか！」

つまり、昔なじみに一言も相談されなかつたと云つ事で腹を立てているのかも知れない訳で……長々と直紀の説教は続いたのである。

「で、ホシは錦織雅樹なんだな？」

結論的にはそうである。刑法的に云ひて前回、直紀は口走つた。

「経歴等こちちで探つてみる。後、叶には万全の警護を付けるから心配するな。取り敢えず、上層部と部下には俺から上手く云つておくから心配するな」

との、最後の言葉を後にしようと直紀はドアを開けて閉める時、「都住？毎年送つてる年賀状。それに連絡先書いてるから……見とけな！」

それだけ云つてブツブツと出て行つたのである。

「やられたなあ～一本とられたわ。朔夜？」

「毎年来る年賀状、山積みの段ボールの中で眠つてますからね……探すの一苦労ですよ」

一息入れると、本題に移つた。

云いたい事だけ云つて去つて行つた直紀には悪いが、朔夜は叶からここに来る迄の経緯を聞き出さなければならなかつた。

叶が知つてゐる限りの事から察するに、絶叫の声に気がついた沼淵佳子の両親が、警察を呼び救急病院に連絡をしたらしい。そして、

朔夜が渡した名刺で朔夜の身元は判明できたらしいが、沼淵佳子の頭はまるで脳内に植物の種でも仕掛けられたかのように発育し全てを吹き飛ばした。即死状態で酷い死体となつて転がつっていたそうだ。叶に連絡が行つたのは、連絡先の名刺に叶の名前も入つていたからである。しかし、この病院を突き止めるのは、難解だつたはずだ。ただ、運良く叶の携帯の電源が入つていた事が救いだつたのである。

「そうですか……沼淵佳子さんは」「くなつたんですね……」

「……」

今回の件で、一番傷ついているのが誰かを悟つてゐる叶は、何も云えなかつた。朔夜の父が亡くなつた時の憤りが今までにここに復活しているのではなかろうかとさえ想つた。

そして、雅樹は本氣でこのゲームを行つている。それも手加減なしに、なり振り等気にせず……

「神楽さんには申し訳ないですが、こうなつた以上、一ちらもなり振り等構つてはいられませんね……撲はこれ程の怒りを覚えた事はありませんよ」

口に出してそれを云つ、叶はこんな朔夜を目にした事はない。その怒りがいつもにも増して、朔夜の真つ赤なオーラを浮き立たせていたのである。

警戒

その後、朔夜と叶はナースステーション横に設置されている休憩所へと移動した。

まだ夜明け前の時刻で本当は就寝時刻ではあるがこの事件のせいで寝ている事などできなかつた。朔夜は十分な処置を受けて一段落はついていた。そしていつしか、雅樹から受けた鳩尾への打撃も薄らいでいた。

「これ、叶の式神の札……」

ズボンのポケットに仕舞い込んでいた焼けこげた一枚の紙を叶に手渡した。

「ああ、気付いた。琴音やろ……大丈夫や。今は深い眠りに就いとる。少しば投に立つたようで良かったわ」

受け取った叶は、それにつっと思を吹き掛け再生の念を送つた。すると、元通りの札に戻る。

「マサキ、かなりの陰陽師やな……俺がその場におつたからと云つても歯が立つたかどうかしれんわ……あんま自分を責めるなや……朔夜。自分を大切に出来んもんが、他人を労る事など出来んのやからな……」

ボソリと零す。そう、叶自身にもどうにかなるその要素はないに等しい。自信がないのである。

「……そうですね。今はこれから先の事を考えましょ。この事件は必ず、今日の朝二コースにとり上げられます。城戸君が情報操作をしたとしても、マスクミは必ず動きます。そうなると、この事件を知つた中島清美は、叶を狙うでしょう」

「ああ、可能性は100%間違ひ無しや。1%の裏切りを期待するのは無謀やな」

叶は頭を捻っていた。もう十分中島清美の願いは叶っているはず。

しかし、その人物の性格がどうだつと、裏には雅樹が絡んでいる。

「計算はどう」返上手く行くでしょうか？」

「さあ、どうやろ……手荒な事はせん。訴える事もせん。上手く行

くかは本人次第やわ」

「ところで、僕が気絶していた時間はどのくらいですか？」

「小一時間や」

「一時間くらいなら、こちらは上手くやれます。あとの事は任せますよ」

「ああ、分かつとる。まかせろや」

そんな会話をしていると、バタバタと急ぐ足音が聴こえてきた。その姿を、薄暗い廊下の中氣付いた朔夜は、

「あ、神楽さん……」

「え？」

自分の名前を呼ばれた事に驚き、こちらを振り返った、一人の女性。それは、まさしく神楽であった。そして、ソワソワとした様子で近づいてくる。

「どうしたんです？ そんなに慌てて……何かあったのですか？」

そんな問いかけに、今にも泣きそうな表情で、

「母の容体が急変したのです。さつき連絡がありまして、それでこちらに……」

「急変？ ですが……昨日の昼は調子が良さそうだったのに……」

その言葉への答えは返つてこなかつた。グッと何かを飲み込もうとしているようである。そして氣が付いたかのように、

「朔夜さんは……あ、その怪我はどうなさつたのです？」

一の腕から手の平、ボロボロになつた全体。

あちこち巻き付けられた包帯に氣がついたのか、息を飲み込むかのように恐る恐る問い合わせてきた。

「あ、これですか？ ……ちょっと階段から転げ落ちました……」

どう考へても階段から落ちてできる傷ではない。打ち身でこんな

風に怪我する事もない。分かり切つた事に嘘をついてみせた。

「それは嘘ですね……」

「……」

「もしかして……弟の雅樹に関係があるのでありますか、……？」
これ以上、黙つておけないと察した神楽は、突然真意をついた事を問い合わせてきた。

「！」

朔夜と叶は絶句した。勘付かれた？しかし何も悟られるような事を云つた覚えはない。そうすると……もしかしたら何かを知つているのかも知れない。色々と考えるがその答えは神楽が握つてこむ。
「黙つている所を見受けますと、雅樹なのですね？あの子は今どうしてます！？」

突然、大人しい神楽の見た目に反するかのような詰め掛けのよつな様子に朔夜は驚いた。こんなに取り乱す彼女を見るなどとは想つてもいなかつた。

「落ち着いて下さ」……どうなさつたのです？神楽さんらしくありませんよ……」

震える神楽の肩をしつかり受け止める。しかし、その態度は変わらない。急に、朔夜を見上げると、視線を脇にそらし、隣にいる叶を見た。

「そちらにいらっしゃるのは、塚原叶さんですね！あなたも陰陽師なら分かるはずですわ、逆風の対処法を！云つべきでは無い事は分かつてます。でも、雅樹の……あの子の対処法は、身内を人柱にすることなんです！母は……うつ……」

神楽の瞳から一筋の涙がこぼれ落ちそのまま泣き崩れた。

「！」

ひょんなことから、雅樹の全貌を知られ、朔夜も叶も一言も言葉が出なかつた。そして、暫くそのまま神楽が泣き止む迄待つてゐたのである。

「とり乱して申し訳ありません……わたし、母の所に参ります。本当に申し訳ありませんでした」

泣き止んだ神楽が発した言葉はそれであつた。そして、急ぐようにその場を後にしようとした神楽の一の腕を朔夜は取つた。
「もしかしてあなたは、この事を知っていたのではありませんか？いえ、僕達がどうこうと云うのではなく、これまでの事件の裏に隠されている何かを感じ取つていたのでは？双児には色々な不思議な力があると聞かれます。雅樹君に陰陽師の血が流れているなら、神楽さん、あなたにも……」

その質問に、神楽は一瞬寂しそうに笑つた。そして一回縦に首を振り、そつと朔夜から離れ、

「母は、もうこれ以上もたないでしょ。次は私の番です……汚れ切つた血筋は何も生みませんね……それが錦織家の最期にならうとももうどうでも良いんです……」

何かを断ち切るかのように勢い良く、振り返りそして、暗闇の中去つて行つた。あの、和やかに家族の話をした時間が色褪せていく。そして朔夜と叶はそれを黙つて見送るしか出来なかつた。

朝は、雨雲を携えた嫌な天氣だつた。それは今朝方個室で亡くなつた、神楽の母を悼むような、そんな一日の始まりだつた。

直紀が気を遣い配置した警備を断り、今日一日は決して点滴等の処置を行わないと云う決まりでその場を切り上げた。

叶は、既に朝食をとるために病室で横になつっていた。その横には、朔夜が付き添つてゐる。一人とも神楽の件から何も語らず静かに考え方をしていた。

大体の真相は掴めてきたような気がする。実は錦織家は代々陰陽師の家系で、そして、雅樹、神楽にもその力が宿つてゐる。しかも、二人の間にははかりしれない溝がある。それを、今回の事件で母を殺してしまう程の逆風を浴びせてしまったことで、次は神楽にお鉢が回る事になる。血が死を招くそんな家系だとは……やり切れない

思いが朔夜の中で渦巻いていた。叶は？叶の術の逆戻対策は？ふと、叶の顔を見た。

「叶は違いますよね？」

ボソリと呟く。

「何がや？」

惚けているのか？それとも、木當に分かつていなか分からないが、それだけ云うと叶は黙り込んだ。しかし底しれない怒りが伝わってくる。だからその先は何も云えなかつた。そんな時、

「塚原さん、朝食の時間ですよ～廊下に取りに来て下さいね～」

四人部屋の一角を仕切つているカーテンをくぐると、一人の看護師が入つて來た。

「ああ、分かったわ～今日は、点滴や検査無しなんよな？」

「ええ、その予定になつてますよ。昨日は大変だつたそうですね。朝食とつて昼まで寝ついても結構ですよ～」

いつも世話をしてくれるその看護師は丁寧に答えてくれる。

「ほな、朝食食べるか

叶は、静かにベッドから起き上がり自由な足で廊下迄歩いて行くとお膳をとつて來た。

「朔夜、お前も食堂で飯食つて来いや。ろくなもん食つとらんやろ？こここの飯は栄養だけは抜群やしオレだけ食つのも気が引けるわ…」

…

その言葉を受け、朔夜は一階の食堂へと足を運んだ。しかし、一階の食堂の時間は面会時間を見越しての開店だったので、朔夜は仕方なく売店でパンを買う事にした。それを持って、叶の病室で食べる事にしようとしたが、歩を戻した。

「塚原さん、やはり点滴をする事になりましたよ」

朝食を食べ終え、お膳をかたしに行つた先で、通りすがりの看護師が静かに声を掛けてきた。

「え？ そなん？」

その看護師の顔に見覚えがなかつた。そこで確認の為に名札を見た。名札には、一富和恵とある。叶は、訝し気にその看護師を見た。そしてにつこりといつもの営業スマイルで、しらじらしく、「変やなあ、無いつて聞いてたんやけど?」「何やら問題があつたようですが、主治医の判断です。また後で

病室の方に参ります」

少し暗い感じのその看護師は、それだけ言つとスタスタとナースステーションへと向つて行つた。

「ビンゴやな……」

叶はその後ろ姿を見送りながら病室へと歩いて行つた。

その看護師は、その後直ぐに叶の病室に來た。まだ朝早いので、どこの病床もカーテンを引いていた。プライバシーを守る為の物でもあるし、一人になりたい者にはうつてつけである。

一富和恵はそのカーテン越しに、

「点滴をします。入りますね」

一言添えて、入つて來た。

カラカラと、点滴用の器具を設置しながら、テキパキと行動している。歳はまだ若い。しかし、滲み出しているオーラは暗く濁つた青色をしていた。

「その点滴の薬品何てのや?」

叶は、興味深げに問い合わせた。

「ビタミン剤ですよ」

簡潔に答える。しかし、テキパキしたその行動の先に、いざ針を叶の左腕の静脈に打とうとする際、一瞬であるが戸惑いが見られた。「無理な事はせん方がええで……天使は全てを知つているだろ?一富はん!」

打たれる針を避け、左手で一富和恵の腕を叶は取り上げた。

「……何をするんですか!」

一富和恵は震えながら腕を振り払い突然声をあげる。それをきつ

かけに、

「縛！沈在！」

呪文を唱え、叶は一宮和恵の顔前に左指で印を結んだ。

「朔夜、出番やで！」「

その一声で隣でパンをかじっていたハズの朔夜はスッとカーテンの隙間から現れた。そして動けなくなつた一宮和恵の目の前に手の平を持って行くと念を送つた。お得意の催眠術である。一宮和恵は、ゆっくりと目蓋を閉じ、叶のベッドに倒れ込んだ。その身体を朔夜は静かに抱きかかる。そして叶がベッドから這い出たのを確認するど、そのベットに横たえる。

「それでは行つて来ますね。後は宜しくお願ひしますよ！叶！」「ええで……」

その眠りを追うかのように朔夜はベッドの片隅に上半身を預けた。四方には結界の札を張り付けられている。安心しきつて朔夜は一宮和恵の夢の中へと旅立つたのである。

「助けて、誰よ！私を追わないで！」「

真つ暗な暗闇をひたすら駆けずり回る一宮和恵。

パンプスを履いた足音が、カンカンと木靈する。

朔夜はその有り様を暗闇で浮かび上がるその影を空中でとりえていた。

追い掛けている相手は探偵のようにつかず離れず走つていた。

『異性間の問題のようですね……』

特に多いのにこの類いがある。一人の問題は、この辺りにあるらしい事が判明した。

『きっと、沼淵佳子との間の三角関係が原因なのでは無いだらうか？追いかかれられるのは、仕事上と云う事もあるのですが、相手は探偵……やはり妥当でしょう……』

田をこじり、その状況をインプットした。そしてこの状況を変える為に、

『神聖覧強！夢売買致します！』

朔夜は辺りのこの状況をなぎ払う為の夢交換を行つ事にした。一時間の睡眠の代償を克服するには早い内がいい。

辺りは一気に白い空間を作り上げた。そして、追いかける人物の影が一気に明らかになつた。その人物は、黒いコートを身に纏い、顔全体を深い帽子で隠している。

その人物が誰なのかを突き止める為に、朔夜は、

『散！』

その人物の着ているコートと帽子を取り上げたのである。

『沼淵佳子！』

朔夜は驚いた。死んだはずの人物がこの夢の中で追い掛けまわしているのであるのだから……

「嫌よ、来ないで！」

後ろを振り向いた瞬間、それが、自分が殺そうと団論んでいた人物だと知り、よりいつそう走る事を止めようとはしない二宮和恵……

『面倒な事になりましたね……どうしましょう』

朔夜は考えに考えた。こうなると厄介である。

天使の啓示を信じている二宮和恵に関しては、夢を好転させる事を考えるより、逆に、突き落とされる自分を考える方がいいのかもしれないとそう考えた。

『場所を移します……神聖覧強！夢売買致します！』

そして、断崖絶壁の構図を重きに置いた。

追いかけられる先、そこは荒れ狂う海への絶壁。ジリジリと追い詰められ、二宮和恵の置くべき足下はもうない。

「悪かったわよ！あなたを殺してあの人を手に入れる事ができるなら、私は何だつて出来るわ！でもね、佳子あなたが悪いのよ！人気が有るからつて、何でも手に入らない物が無いって思つているあなたが！」

ジリジリと、追い詰める沼淵佳子。

「でもね、後悔しないなんて思つては無いわ。唯一の親友ですもの

ね……あなたと一緒にいる時間は楽しかったわ……」これは本当よ……

カラリと、岸壁にある瓶が崩れ落ちた。

「何か云つてよ!」

一宮和恵は叫んでいた。息せき切つた声はカラカラに乾いた喉から発せられ、かな切り声であった。それをきっかけに、

「あなたが死ぬ所を見たらスッキリするわ。私を納得させて……これは夢の中。そこから落ちたとしても、死ぬ事は無いわ。私の事を思つていてくれると云うのなら実行してみせてよ!」

荒れ狂う海の岸壁は現実味を帯び、下を見下ろした一宮和恵はガクガクと膝が震えている。夢だとしても、怖くて飛び降りるなんて出来はしない。

「どうするの? それとも全部嘘なの? 怖いなら手伝つてあげる……」

沼淵佳子は、トンシと一宮の肩を押そうとする。足場が今にも崩れそうだ。

「本当に夢なのね? 信じていいのね? それで許してもらえるのね?」

一宮和恵は困惑していた。しかし、それを紛らわすように沼淵佳子はニシ「コリと微笑んだ。

「さよなら……佳子……」

海の方を振り向くと一宮和恵はトンシと空中へ身を投げた。そして断崖の果てへと消えてしまったのである。

『全て片が尽きましたね……僕も限界です……』

そして、この夢は静かに幕を下ろしたのである。

田を醒ました朔夜を、叶は静かに見守った。そして、微笑んだ。

「見てみい……」

ベッドの上に横たわっている一宮和恵の頬には静かに一筋の涙が伝わっていた。しかし、その表情は心無しか晴れやかである。そして両目蓋はゆっくりと開かれたのである。

「どうですか？」気分は……

「ここは？」

「現実の世界ですよ。あなたの心に潜んでいる暗い影はもう取り払いました。もう悩む事は無いんですよ」
全てがこれで終わったのだと告げる。

「あなたは？」

「僕は、こういう者です」

名刺を差し出す。

「昨夜、あなたとチャットを交わした相手でもあります。こういう風にあなたをおびき出した事はお詫びします。あなたに依頼した塚原叶は僕の相棒です……」

「！では、あなたが桂子を……」

現実では、沼淵佳子は死んでいる。だからこそ一富和恵は事に及んだのだ。

「いえ、この事件を阻止する為に僕はあなたとの取り引きに応じた。しかし、それを阻む者の手で沼淵佳子さんは殺された……全て僕の責任です……だから貴女が心を痛める必要は無いのですよ」

秘めた思いを心に止め、朔夜は一通りの事情を話す。そこに天使なんて物は存在しないと否定を込めて……

「私はこれからどうすれば良いのでしょうか？犯行に及ぶ一因を作つた私は……欲望のまま自分を見失い、ただ見えない何かに心を委ねこの神聖な場所で人を殺そうとした私は……」

全てを聞き終え咳くように一富和恵は朔夜に問うことしか出来ず、涙を浮かべた。一時の氣の迷いだつた事を悔いていたのである。

「安心して下さいあなたを訴えるような事はしません。良いですか？これは僕達だけの秘密です。それにあなたは迷っていた。そうで無ければ、針を刺す事を躊躇いはしない……ただし、これで全てが終わつたとは考えられないのも事実……」

朔夜は恐れていた。賭けの日数からしてまだ一日ある。雅樹のシナリオはどこまで書き進められているのか？この占夢を考慮に入れ

ているとしてたらまだ油断はならない。

「もし、あなたの身に何かが……見えない何かが起こつたなら、名刺にある僕の方迄連絡下さい。これ以上の犠牲は阻止したい……」

朔夜はしつかり一宮和恵の目を見詰めた。それを受け止めて一宮和恵は領く。

「ありがとうございました」

ベッドから起き上がった一宮和恵は、犯さずに済んだ事を肝に命じたかのようにシッカリと地に足をつける。そして、朔夜の申し出通り、何ごとも起こらなかつたかのようにその部屋に持ち込んだ点滴の器具を携え病室を後にしたのである。

沈黙

それから後は、何事も無く平和な時間が流れた。

「占夢の間、厄介な術は一切なかつたで……マサキは何を考えとるんやろ……」

ふと、叶は思い付いたかのように咳いた。まるで息を潜めたかのように、厳かに行われた占夢。そんな会話を吹っかけた時、ひょっこりかえでが現れたのである。

「ちわ～あれ？ 朔夜ちゃん来てたの？」

叶しかいないのであらうと思つていたのか、意外な顔をした。とい

うより少しバツが悪そうな顔と云つた方が良いかもしれない。

「ええ、ちょっとお邪魔しますよ」

朔夜は何も無かつたかのような数笑みでかえでを出迎える。しかし、体中の包帯を目にしたかえでは驚いたようだ。

「どうしたの？ 朔夜ちゃん！」

大きな目を見開いて詰め掛けるように朔夜の横に座つた。

「まあ～色々あります……」

しかし、

「それって、もしかして昨夜の事件絡み？」

かえでは何かを察したのか、ズバリ云い当てる。

けれど、朔夜はその事には触れず笑つて聞き流しておいた。

「もう、下北沢は大混乱よ。次狙われるのは自分かも知れないってみんな引いてるわ！ 後、この情報はマスコミから仕入れたんだけど、ここ最近の下北沢事件関係を洗つて行くと、共通して必ず夜になると起ころるらしいわ……」

かえでは、そやつて自ら仕入れて来たネタを朔夜と叶に話して聞かせる。そうする事で、自らも興味を持ち奮い立たせていらし

い。

自殺未遂で踏み止まつた女性が意識を重り戻し、警察に全ての事情を話した事などどこから手に入れたネタか分からぬが事細かく教えてくれた。どうやらその女性は、会社の金に手を付けてその事がばれそうになり自ら命を投げ出したという事だつた。その美貌にはあるホームページを介し、天使に憧れ、夢に出て来た天使の御告げに従い、自鞍未遂を行つたと言う事だつた。

今はそのホームページの捜査に踏み込んで云う。しかし、裏ホームページであらゆる所を経由しているから複雑なのだと事で警察の手腕を持つてしてもそれを立ち上げた身元は知られていない。

「ここにいる朔夜と叶、直紀以外は……」

「夜ですか……確かに犯行可能な時間と云えば昼より夜の方が目立ちませんからね~」

一見当然の事のように思われる節を云つているが、実の所、全て雅樹が夜にしか動けないのでは無いか？朔夜はそう睨んでいた。暗闇に潜む死への誘惑。それを行えるのはもしかしたら、夜だけ？いや、訳ありで夜にしか実行できないのかも知れない。

そこで、これ以上かえで介入を許す訳には行かないと朔夜は話題をそらした。

「かえでちゃん？次のお仕事はいつになりますか？」

話にのつてくると思っていたのに、その腰を折られかえではブクツと頬を膨らませたが仕方なくスケジュールを話しあじめる。そうこうしていると、穢やかな時間が過ぎて行きかえではこの場を後にして

した。

「叶、僕はそろそろ戻ります。賭けの期限は明日まで……かえでちゃんの話から察するに、雅樹は今夜か、明日の夜事を起こすはず。叶はどうしますか？出来れば、一時退院して事の成りゆきを見守つていて欲しいのですが……」

夜半に起こつた事が、脳裏から離れない。叶のことを想うと無理な事はしては欲しくは無い。でも、不安と怒りが同居してしまつた心中は今の朔夜にはどうしようもなかつた。

「オレがおつたかて、役に立つかどうか分からんで……？」

そこで朔夜の表情を伺う。

「そつやなあここにあるのも退屈やし……それに朔夜一人つちのうのも心配やしな~……なんや?いつも通り『お仕事ですよ』の一言でええんやけどどな~」

やれやれと云う表情で、この報酬に見合うだけの事は頼むな。とも言わんばかりに微笑むと、

「外泊届け出してくれるわー」

速やかに叶はナースステーションへと歩いて行つた。

病院の反対を押し切つての行動の果て、自宅に戻つた朔夜と叶は、朔夜が昨日リストアップしておいたデータの資料を見直していた。下北沢で起こりうる事を考慮に入れながら。そして、そのリストに二宮和恵の住所録が載つている事を確認したのである。

「あの看護師、下北沢の住人なんや……」

リストに目を通していた叶は嫌な予感がして呟く。それを朔夜は、「関係者と云うからはやはり同じ下北沢の人間であつてもおかしくはありませんね。名刺を渡しておいただけで無く、この資料が役に立てるかも知れません。念のためこの住所は控えておきましょうか……」

叶からそのリストを受け取つた朔夜は、手帳に書き込む。それから、昨日釘付けになつたホームページを見て回つた。が、そこには次のターゲットとなり得そうな人物は浮かび上がらなかつた。次第に暮れ行く一日。その緊張感は一人の心に重くのしかかっていた。

そんな時、一本の電話が朔夜の携帯に流れ込んで來た。それは、祖母からであつた。今日の夜、錦織邸にて通夜があるからそれに出るようとの事であつた。

朔夜は、神楽の様子も気に掛かっていたためその申し出を無下にできなかつた。それに、この通夜に雅樹が現れるのでは無かるうかと一瞬思つたりもした。

人柱にされた母親をどう云う田で見るのか？しかし、神楽は雅樹の行方を知らない。現れないかも知れない。子供は親を選んで生まれては来れない事は重々承知している。しかし、それでも、母を慕う気持ちが雅樹に無いとは云い切れない。

「叶？ここで御留守番していくもあらせんか？ホームページの監視も宜しくお願ひします。僕は神楽さんのお母さんのお通夜に行つて参りますから」

「ええけど、無理すんなや？」

「無理な事ではありませんよ。このくらいの事で……それより、僕の携帯はここに置いて行きます。何かありましたら、神楽さんの連絡先を教えておきますから、こちらに連絡下さい」

自らの携帯に登録している番号を教えておく。通夜の最中に自らの携帯に電話をかけて来られるのも厄介だし、礼儀に反している。そう思つた結果だつた。

「よう分かつたわ。ほな気を付けてな～」

不自由で無い左腕で軽く朔夜の肩を叩く。

「お願ひしましたよ」

こうして、通夜の為の用意をして朔夜はアパートを出て行つた。

通夜は厳かに行われていた。広い敷地内に建てられた大きな格式高い建物に陳列している人の数は驚く程多かつた。さすが、由緒正しき家柄であることはこれだけで実感できた。しかしそれにしては、入院していた病院はそこまで大きな病院では無くて……個室だと言う他以外は何もこの家を考えてみると質素に感じられた。なぜ、もつと大きな病院に移さなかつたのか？朔夜は不思議でならなかつた。人柱による病氣としても、不治の病だとしても、もつと医療技術の高い病院に入つた方が家族杓にも安心では無からうか？

複雑な思いが交錯する中、焼香をあげた朔夜は、静かに黒い和服の喪服を身に纏っている神楽に礼をした。それから、身内だけの席を取り持つ事になった。

それを機に朔夜は神楽に話し掛けた。

「この度は……」

ありふれた言葉で御悔やみの言葉を話す。

「朔夜さん来て下さったんですね……」

泣き腫らした瞳が赤く染まり痛々しかつた。

「お父さんは？」

「海外に出ておりまして……明日には着く事かと思われます」

「そうですか……」

自らの妻が先立つたのに、仕事を優先しているのかと思つと神楽がよけい痛々しく感じられた。

周りを見渡す。しかし、雅樹の姿は無かつた。

「弟の雅樹君は？」

「あの子は、一年前からこの家には帰つて来ておりません……どこで何をやつているのかさえわたくしには分かりかねます……」

親戚一同が介してい中、大袈裟な事を云う気は無いのかも知れない。そう思い、朔夜は庭先に神楽を引き連れて一人になれる場所を探した。

朔夜の祖母の家に負けず劣らず、和風の敷地内は、風流さをかもし出していた。

「実は……」

もう、神楽の耳に入れても良いかも知れない。本当はもつと早くに云つべきだったかも知れないと後悔もしていた。賭けの事を……その気持ちは、実の双児の姉弟である一人の亀裂を生むかも知れないが黙つて見過ごす事はこれ以上出来なかつた。

「賭けですか……もうあの子が考えている事がわたくしには理解不可能です……全て話して頂きましてありがとうございます……あ

の、御願いがあります。その……わたくしにも手伝わせて頂けませんか？雅樹をこれ以上悪の道に入り込まないようにわたくしに出来る事があるかも知れませんから……

「危険ですよ？」

「重々承知しております。もう、血塗られたこの家系を断ち切るにはそれが一番ですから……それと、一つ忠告があります」

「何です？」

「今夜は、きっと雅樹は動きません。わたくしの……いえ……何でもありません。取り敢えず動く事は無いと断言できますから、明日の御葬式が終わつたらわたくしを御連れ下さい。あの子には到底及びませんが、微力ながらもわたくしは陰陽師の力が使えます。きっと役に立ちますから……」

動かないとどうして断言出来るのか？朔夜は問いただしたかったが、人柱の継承者。及び、陰陽師がここで味方についてもらえると有り難いとそう想つた。それに身近にいてもらえると、無力ではあるが守り甲斐もある。

「分かりました。では、今夜は失礼します。お母さんの事で疲労もあるでしょう？今夜はゆつくりお休み下さい」

ただの気林めだと思つ。神楽の精神的ダメージを想うと……眠る事など出来はしないだろう。しかしこのままほつておくと倒れてしまいそうな顔色だ。

「満月ですね……」ううう夜は、魔が人の心に住みやすいのかもしれませんね？」

ボソリと呟いた。月明かりに照らされた神楽の横顔は今にも空氣に溶け込んでしまいそうだった。

隘路

その夜は、神楽の「云つた通り何も起こらなかつた。まるで何もかも見通しているかの」とく。そう、これも双子のなせる技なのかもしないと朔夜は想つた。帰宅後、叶に休むように言葉を発した叶は叶で、念のために休ませておいた式神の琴音を下北沢の護衛に解き放つていた。これで少しでも起じうつる異変を察知しようと思つていたようであつた。

朔夜は休む訳にはいかず、ネット検索に夜通し掛かつて目を見張つていた。そうする事で何かしら眠気を紛らわせていいたいのである。かえでの仕事スケジュールの事もあり、溜めていた仕事も少しだけではあるが消化しておいた。そして、賭けの最終日へと夜は明けたのである。

朝からけたたましい携帯の着信音が鳴り響いたのは、叶が起きる直前だつた。

朔夜は自分の携帯を取り上げその受話器をとる。それは、一宮和恵からのものであつた。

「朝早くにすみません」

「どうかなさつたんですか?」

「夢に……天使が現れました。今夜罪を償えと……代償を払うのは当然だと……私はどうすれば良いのでしょうか?……?」

「今はどちらですか?」

「病院へ向つている所です。あの……天使なんていないつておつしやいましたよね?でも、あの夢はあまりにも現実味があり過ぎて……佳子の死体を私に投げつけて……」

「どうやら混乱しているようである。」

「落ち着いて下さい。天使などいるはずありません。あなたを陥れるただの夢です。だから、いつも通り仕事に勤しんで下さい。僕が云う事を信じられませんか？」

「いえ……でも……」

「大丈夫です。あなたは、あなたなりの姿勢でいつも通りしていれば良いのですよ。後は、僕達に任せておいて下さい」

「そこまでして頂くなんて……あなたは一体？」

「ただの、夢占い師ですよ」

受話器を置いた朔夜は、起きて来た叶に、

「ターゲットは一宮和恵さんに決まりみたいですよ」

あらかたの内容はさておき、これから行動を打ち合わせた。

昼から錦織邸の告別式に出る朔夜は、叶とは別行動をとる。叶は、一時秋元総合病院に行き一宮和恵の行動を見守ることになる。告別式が終わつた後、神楽と共に叶と合流。それが、一日のプランであった。

「叶は入院患者として一時戻る事は問題ないでしょう？あと、城戸君にも連絡入れておいて下さい」

「俺の方は全く不自由ないから平氣やけど、直紀巻き込むのはどうかと思うで？」

警察が格んぐるとなると、本格的過ぎて叶の範疇を超えてしまうのでは無いかと案じた。しかし朔夜は、

「叶は、怪我人です。物理的な事に関しては、警察に任せておいた方が良いかも知れません。何かが起こつてからでは対処が無いのですから……」

つまり、人為的な事を考えられてからでは遅いと読んだのである。

「へいへい分かりました。で、直紀の連絡先は？」

「……すみません。あの段ボールの中から探して下さい……」

ザッと五箱ある段ボールを指差して朔夜は笑つた。それを見て、

げつそりしてしまつ叶。

「いらんもんはとつととげづけてしまえ！このドアホ！」

額に怒りマークを浮き立たせながら、それでも云われた事をせつせと行う辺り叶は律儀であつた。そんな中、朔夜は一箱分は手伝つておいた。告別式までには時間は十分にあるのだから。

告別式は、会館で行われた。流石に、大きな屋敷であつても十分に人数を収容するだけには止まらないからであつた。全て取り仕切つていたのは、神楽である。

昨夜より目をはらした神楽がいたたまれなくて、朔夜は目のやり場に困つてしまつた。

「あちらがお父さんですか？」

官僚と云つた風体の威厳の有る身のこなしが厳格さをかもし出している。一見して陰陽師と関わり合いが有るとは思えない。一体、

錦織家はどう云つた家系なのか？

「ええ。そうです……雅樹に似ていますでしょう？私もお父様似なんですね……」

それを決く思わないとも言いたげに神楽は笑つた。

「それでは、後程……」

神楽は忙しそうに次から次にやつてくる弔問者の相手をしていた。氣の毒にと想う。しかし、これだけが彼女の重荷にはならない。そうこれから先はもつと険しい試練が待ち受けていたのであるのだから

ら……

告別式が終わり、火葬場へ。時間は刻々と夜へと流れて行く。今日は、携帯を肌身離さず持つていて。いつ事が起こつても良いように……しかし、全てが事無く夕方の終わりを告げて行つた。

その頃叶は、病院の中をくまなく探していた。先程、自ら短い時間だしと一度トイレに入つて身を隠してしまつた後、見張つていたはずの一富和恵の姿が無くなつたからである。

「変やなあ～」

五階まで、看護婦が歩ける範囲をくまなく捜したはずなのに……最後には拉致があかず、ナースステーションで一富和恵の情報を聞いたうと歩いて行つた。

そこでいつも看護してくれる、担当の看護師に出会い、気軽に声を掛けた。

「なあ～一富和恵さんおらへんの？ ちょっと用事があるんやけど～？」

その看護師は、

「なあ～に？ お気に入りの看護師の後追っかけてるの～？」

叶の女好きを見越して冗談まじりに返して來た。

「ひどいなあ～そんなに女の子に不自由しおらへん」

苦笑いの叶に、

「ちょっと待つてね。呼び出しかけてみるわ」

病院内アナウンスで呼び出しをかける。しかし、暫くしてもその場に待てども一富和恵の姿は現れなかつた。

「変ね～今日はまだ勤務時間のハズなのに……」

と、掌を口元に持つていつて考え方をしていく。そんな時、「一富さんなら先程見なれない男性の方と話をしてたわよ……で、ちょっと出てくるからって病院から外に出て行つたわ……」

奥に控えていたエクボが可愛らしい看護師が思い出すかのように

答えた。

叶は、しまつたと頭を叩かたかのような衝撃を受けた。

「その男、黒髪で細身の女顔みたいな奴とちやうか？」

「ええ、そうよ」

朔夜の静かに怒る顔が見えて来そうで恐い。

「あ、悪いんやけど、一富さんの持ち物何でもええんやけど貸してもらえんやろか？」

そんな叶の急いでいる物云々に、

「これで良いかしら？」

近くに有る、二宮と名前が入つたボールペンを渡す。

「おおきにー悪いんやけど、これ借りるなーそれと今夜も外泊するからーよろしくうー」

「ちょっとー塙原さん！」

呼び止められる声も置き去りに叶は病院の外へと駆け出していつた。

物にはそれを使つてゐるその人の愛情などが込められている。いわゆる、付喪神。それを利用する事で、術を掛ける事も可能である。取り敢えず、今、二宮和恵がいる場所だけでも把握しなければならない。

「戻儀！」

走りながら自らの式神の琴音を呼び戻す。肩に止まつた一羽の鳩は叶に差し出されたそのボールペンを飲み込むと、再び飛び去つた。二宮和恵を捜す為に……

病院の外には、昼に直紀に連絡して警備にあたつてもうらつた警察官が配備されていた。

「ここから、若い男と看護師が出て行つたやろ？どっちへ行つた！」不躾に問われ、その警察官は不快な表情で叶を見た。

「いや、看護師は出て来ないが、若い男なら何人も出て來たが？」やられた……田ぐらましや！しかも堂々と行われとる。なんて奴や……チツ。と舌打ちする叶。

「俺は、城戸直紀の友人や。捜査に協力してもうりょうに、話はつけどる！」

城戸と云う名前にハツと気が付いたのか、敬礼し、引き締まつた顔に戻つた。

「その男たちの中に、顔立ちが女みたいで、身長がこんなくらいの奴おらなんだか？」

その言葉に、脇に控えていた一人の警察官が、

「それなら、そこのターミナルでタクシーに乗りましたが……あんな綺麗な男もこの世にいるんだなどと想つたもので記憶に有ります」

「どっちに向つたんや?」

「はっ!この道ぞいを西に!」

「分かつた。サンキューな!直紀にもつ警備は必要無いと塚原が云つてたと言つといてや!」

特別配置されていた警察官はその言葉で直紀に連絡をいれはじめた。叶は、その様子も見ずに慌ててタクシーを捕まえた。そして、琴音からの情報も踏まえて今、叶は走り始めた。夕日に照らされた街の中を。

「どういふことなんですか?」

叶からの電話に朔夜は驚きを隠せなかつた。詳しく述べ、タクシーの中なので云えないが、一宮和恵が雅樹に連れ去られた事を聞かされた。

「分かりました。」こちらももう終わりですから、これから神楽さんを連れて向います。今はまだ正確な場所は分からないんですね?」

受話器の向こうで叶が状況を話す。

「下北沢付近に向つてゐる?……なるほど。それでは、急いでそちらに向ひます」

携帯を切り、朔夜は急いで神楽のもとへと駆け出した。

「神楽さん?少しよろしいでしょうか?困つた事になりました……」

人の目に触れない所で、朔夜は神楽甲に事の次第を伝える。

「分かりましたわ。このままの格好で申し訳ないのですが、わたくし、今すぐ用意して参ります」

黒い着物の喪服を纏つた神楽は必要な物を持ち、着いたばかりの錦織邸を朔夜と出たのである。それは、陽が暮れたそんな時刻であった。

真実

「神楽さんのお父さんもやはり陰陽師なのですか？」

錦織邸で呼び寄せた下北沢駅行きのタクシーに乗り緊張した中、疑問として心の中に止めていた事を朔夜は神楽に問い合わせた。

「ええ。でも、お父様はそんなしがらみを公に出さずに仕事に打ち込んで来られた。しかし、それは見せ掛けだけで本当はわたくし達の見えない所で力を使用していたのです。今の世を支える為に、裏では悪い事をしてきました……。その結果、官僚としてのお父様は今の地位を手に入れたのです。時代はそんな陰陽師の力を受け入れているのかも知れません。でも、雅樹はそれを受け入れる事を嫌がつた。一度家から遠ざかっていたあの子が何故今頃になつてこんな事を……」

神楽は全くその理由が分からぬとも云いたげに、唇をぎゅっと噛み締めた。その唇が薄らと紅を帯びている。

「やはり、その力のせいでお母さんに負担が行つたのですか？」

「母では無く、祖母です。人柱は一代前の人物をさします。代々強く受け継がれて来た力は、一代前の犠牲で成り立つております」

「…………では、お母さんが亡くなつた今、一代前も何も無いでは有りませんか？何故、今度は神楽さんにあるのです？」

朔夜の頭では分からなかつた。こう行つた事は、朔夜の範疇では無い。

「異例が有るのです。人柱が亡くなつた場合、その血を濃く受け譲がれた者。女人を自動的に選び出すのです。だから、双児のわたくしがその任を受ける事になるのです。そのことは、雅樹も知つてゐる事なのです」

だから、神楽を守る事が出来るかと云いたかつたのか……朔夜は

あの時の雅樹の言葉をやつと理解できた。

そんな話をしながら、朔夜は叶からの電話を待っている。行き先はどこなのか？下北沢の一体どこ？

ポケットに仕舞い込んだ携帯は一向に鳴る様子も無い。ふと、神楽を見た。すると緊張感を謡るぎないものとするかのように、シックカリと目を見開いていた。そうしないと睡魔に襲われる……そう感じているのかも知れない。

朔夜は、この渋滞に巻き込まれたタクシーの中、シックカリと現状を把握しようとしていたのである。

「タクシーのおっちゃん、ここで止めてな」

叶は、料金を払い終え、路上に身を乗り出した。

琴音の気配がここからする……そう感じ取ったからである。時間的にはもう陽は沈み、月と星が光り輝いていた。

住所的には下北沢の丁度東に位置する事がわかつた。近くの通りはまだ人気が多い。それでも繁華街から離れた場所ではあった。番地を調べようと表示されている表示板を確認した。見覚えの有る番地。それが、一宮和恵が住んでいる場所だと気がつく事は遅くは無かつた。そこで、いち早く朔夜に連絡を入れたのである。

「朔夜！分かったで……一宮和恵の住所や。はよ来い！待つとるで！」

連絡をつけた叶は、琴音の気配を頼りに路地を探して回つたのである。

「お前は、天使の啓示をどう想つていてる？」

雅樹は、一宮和恵の部屋で問い合わせた。でも一宮和恵は返事が出来なかつた。完全に自我が無かつたからである。

「オレに罪を押し付け、自ら汚して無いその綺麗な手に……何を想う？」

一人暮らしのマンションは開いたカーテンのガラス越し。月の光

のみのこの部屋で、一宮和恵の身体の上に雅樹の影が落ちている。そんな中、独り言を唱えていた。

「もう少し持つてみるかい？正義のヒーローが登場する迄……」

雅樹は不適切な言素を吐いたかとも思えるよつと、苦笑いした。その表情を、一宮和恵は夢の中で悪魔に微笑まれているかのじとく困惑している。暗示をかけられ、云われるままにこの部屋に雅樹を上げた。そして今は現実と夢の中を彷徨つている。それは、まるで死への誘惑を搔き立てられるかのようであった……。

叶は、見つけ出したマンションの部屋を全てあらうていた。一宮和恵の部屋はどこなのかを……

琴音がこのマンションにいる事は掴めた。しかし、細部迄は当てられなかつた。妨害電波が阻止している。それが、雅樹特有の物であると掲握するのは早かつた。

「どこなんだ！」

と、階段を一つ一つ上がって行く。しかし、表札を出していないが為判らない。朔夜に連絡を入れてみるが、圏外らしく応答も無い。仕方なくマンションを一時抜け出し朔夜が到着する迄待つた。その間、このマンションを取り囲むように、結界を張ろうと方位陣を引く。何かをやっておかなければ、いつ何時呪術が行われるか判からない。左腕の時計を見ながら、刻々と過ぎて行く時間を見ぬながら叶はなす術なく一階の踊り場に座り込んでいたのである。

一時間後、暗い夜道に車一台分のライトが点灯して來た。朔夜と神楽を乗せたタクシーが一宮和恵の住所に辿り着いたのである。一階の踊り場に座り込んでいる叶を発見した朔夜は、

「どうしたんです？叶？」

気分が優れないのかと心配して問いかけたが、

「部屋が分からんかつたんや！」

の一言で安堵の溜め息を漏らした。

「505ですよ」

朔夜は、神楽と叶を引き連れてその部屋へと向つた。しかし、五階にあるはずの部屋は存在していなかつた。また田隠しをされている。

「これは……雅樹の特技なんですね……少し離れていて下さい」

神楽は、落ち着いて504と506の間に存在しているであろう壁の前に行くと、印を結んだ。

「幻視、開眼！」

そうすると、歪んだ空間がユラユラと明かりを巻き込みそして、一つの扉が浮かび上がつて來た。

「在つた……あんた凄い技やな～俺にも教えてや！」

叶は、興味を覚えたのか、飛び上がつて喜んでいた。しかし、

「これは、錦織家特有の術ですの。塚原さんには無理ですわ……」

静かに否定の言葉を返す。そして、その扉の中に入ろうとノブに手を掛ける。それは不用心にも鍵があいていた。中は真っ暗で、人の気配を感じ取る事が出来ない。いないのでは無からうかとさえ想う。しかし、

「雅樹はいます」

神楽のその言葉に、朔夜達は誘われるかのように入つて行つた。

「ようこそ、天使の園へ……」

3DKの一番奥の部屋に、雅樹はいた。居たと言つには何かが変である。それが何かは具体的には云えないが……

「久し振りだね、神楽姉さん……もう何年になるかな？」

「…………一年よ」

「そんなもの？オレにはもつと長く感じられるよ。しかし、シナリオが一部変更されたな……まさか神楽姉さんがやつてくるとは想つて無かつたよ……」

やはり、シナリオははじめから書きおこされた物だと自覚したとたん、朔夜の背筋に冷たい汗が流れ落ちた。

「わたくしが来ないと思つてゐるようでしたら、甘いわ……。そうでしたわ、昨朝お母さまは亡くなつたわ……あなたは何を考えでいるの！」

はた目から見ていると、まるで姉弟喧嘩でもしてゐるかのようである。

「くたばつたか……それで、業を煮やしてやつて来たんだ？姉さんは！」

カーテンがフワフワと揺れている。逆光の中の雅樹の表情は全く読み取れない。

「何故なの？あんなに陰陽師の事を疎んでいたのに……」

「疎んでいると、一つ分かつた事があるんだ。聞きたい？」

「……」

言葉を詰まらせていた神楽は頭を垂らした。それを合図に、雅樹は自らの足下に転がつている一滴神樂を抱え上げ、窓際へと後ろ足で歩を進めた。

「現実を受け止める事もできないオレにはこれが一番だつて事が分かつたんだよ！」

「やめて――――！」

雅樹が印を結び呪文を唱えると、突然神樂が発する絶叫が、辺りに響いた。その瞬間、神楽は心を抜かれたかのように失神した。

「神楽さん！」

神楽を受け止めた朔夜は床に静かに横にした。

「あはははは！これで、勝機はオレのもんだ！」

突如、カーテンの間から斬り付けられるような風が舞い込んで来た。その風は下から一気に伸びて来た樹木の風圧で、その樹木の枝がスルスルと伸び雅樹を包み込むと身体は宙に浮きあがつた。

「なんや！これ！……」

叶は、今何が起こつてゐるのか分からないとでも云ひたげに朔夜の影から身を乗り出した。

「オレは五行五元素の内、特にずば抜けて水を操る陰陽師。そして

一般的に出回っている陰陽師とはケタが違う！そして、神楽をも手に入れた！完全無欠だ！賭けはオレの勝ちだ！残念だつたな～

「そう云うと、念を送り、樹木に包まれたままカーテンの外に飛び出した。それを追つて窓際へと朔夜と叶は駆け出した。

「ほう……で、ここに地上に一宮和恵さんを突き落とすと云うシナリオですか？残念ですね。あなたの賭けは成り立ちません。以前云いましたよね？一人で何でもできると思っている方が驕っているのではないかと！」

突然……マンションの下からパツと照らし出す光で雅樹の身体は浮き立つた。

「警察か……」

下から浴びせるように光を灯している警察官の群れ。その中に直紀の姿を見つけた。

「直紀間に合ひたんかい……」

叶は、へたり込みそうになつた身体を押し殺して、一宮和恵の部屋から駆け出して行つた。

「おい！あの男、異様に伸びた木に巻きつけられて宙に浮いてるぞ！しかもこの木、動いてる！」

外の警察官は、このあり得ない現象に目を見張つていた。そして、急いでその部屋の下にマットを敷く用意が始まった。

「小賢しい真似を……」

そう呟くと、雅樹はより高みへと樹木を伸ばし身体を浮かせて行つた。それを目で追う朔夜は、部屋を出で、マンションの屋上へと急いだ。倒れたままの神楽をそのままに……

「のマンションは、十階建てのかなり新しい物であった。エレベーターを使い一気に屋上へと向づ。

外の空気は雅樹に有利に働いている。それを感じると朔夜にも分かつた。

「一宮和恵さんを返して下せ……今ならまだ間に合います……」

「流石にマッチを引いたとしても、この画さから落ちると無事には済まない。」

「これ以上続けて、雅樹君には何が残ると言つのですか？神楽さんを守る為に何故止まらないんです。あなたが持ちかけた賭けに何故そこ迄神楽さんを巻き込むのです！本当は守りたいのでしょうか？」

朔夜は、マンションの屋上のへりに足を掛けた。

「神楽、神楽と言つなーお前は何も知らない癖に！」

「知る訳ないでしょーうー君と僕とでは一緒にいる時間の長さが違うですから！」

そこで大きな枝伸びてきて朔夜の首を締め付けた。

「グッ……」

苦しくてもがく中、

「神楽の意識界とオレの意識界は繋がってるんだ！あいつが就寝するごとに、全部オレの中に流れ込んでくる感情の嵐。それは、オレの力を增幅させ、今ではこの通り……死への甘美を味あわせてくれる……あいつさえいなければ、何も問題なんて無いんだ！平氣で眠りに陥る姉さんは、オレの事なんて考えて無いんだ！」

より一層きつ々締め上げられる木の縄は、朔夜の意識を遠のかせて行く。

「莫迦な……事を……」

うめき声をあげる中で朔夜は思考を取り戻そつと必死だった。

「のままで死ぬ訳には行かない……叶！」

そう心で念じた時、木の縄は弛んだのである。

その頃の叶は、結界の内に有るこのマンションに術を行つた。

「臨・兵・鬪・者・皆・陣・列・在・前！」

吹き上げる風が雨雲を呼んだ。そして、雷鳴が轟いて来たのである。

突如の雨に周りの警官達が、咄嗟に頭を手で覆っていた。

「俺ができるんはこのくらいや……朔夜待つとれ！今戻る！」

一気にマンション周りに上昇気流のマットを敷き詰める術をも施し、直紀に一礼すると叶は505室へと向つた。

「こんな術が使えるのか……意外にお前付の陰陽師もやるじやん？しかし、雨はオレに味方してくれるんだぞ……すなわちそれを相生と云う」

雷雨の中、雅樹は樹木を上手く操りながら雅樹は云う。

「しかし、今この手を摩したとしても地上の風のマットが守つてくれる云う訳か……よからう、その心根だけでも組んで、この供物を手放そつか……」

そう云うと、スッと腕を下ろした。その為に一宮和恵の身体は地上へとまっ逆さまに落ちて行つた。それを見守る雅樹。しかし下降して行くその身体は、何故か途中でガクンと止まつた。

それは505室の部屋の前であつた。

「何！」

氣絶していたハズの神楽が無理矢理意識を取り戻し、窓際で一宮和恵の身体を両腕で掴んでいたのである。

そこに駆け込んで来た叶が自由の効く左腕で神楽と一宮和恵を部屋へと引き込んだ。

「無理するんやから……まつたくこのお嬢さんは……」

自分の事を棚に上げてそんな事を云うと、叶は窓際から朔夜に二マリと笑つてOKサインを出す。ホッと一息つく朔夜。それに気が付いた雅樹は、急に取り乱した。樹木を上手く操れなくなつたのである。

「神楽姉さん……」

表情が先程と異なる。

頭を抱え、うめき声をあげると、雅樹を包み込んでいた枝の力が弱まりふと地上に落下しそうになつた。それに気がつき、朔夜はその雅樹の手を取り上げた。下は上昇気流のマットがあると云つても、やはり落ちて行く人を助けずにはいられなかつた。

「なぜ……」

雅樹の身体の重みが、朔夜の右腕に掛かる。ギシギシと骨が軋む。これが命の重み。こんなに重いと自らも落ちてしまいそうだ。しかも、この天候で、濡れた肌が滑りやすい。

そこに、叶と神楽が現れ、三人掛けかりで雅樹を屋上に引きずり上げたのである。

引きずりあげられた雅樹は、

「何故助けるような真似をする！オレはお前などに助けられる謂れなど無い！」

怒りに震えた雅樹を見下ろしていた三人であつたが、その次の舜悶『パシーン』と、その横つ面を渾身の力を振り絞つて神楽が叩いていた。

「何云つているの！こんな風に身を呈して助けてくれるなんて人、他にいやしないわよ！何寝云つているの！自分が不幸だなんて思わないでちようだい！」

神楽の怒った顔なんて初めて見たとでもいう風に雅樹は驚きの表情で見上げていた。その周りは雷を轟かせる雨が叩き付けていた。もう四人ともずぶ濡れである。

「わたくしは……雅樹の抱えている辛さなんて分からぬわよ！わたくしの感情が、意識が……あなただけに注がれている事を……毎夜魘されていたあなたの事を聞かされた時は辛かつたわよ。でもわたくしだって、いつ術を使われお母さまのように命を落とす事になるか気が気では無かつたわ！この気持ちは、雅樹、あなたには分からぬでしよう？だから初めからこんな力に頼らずに、生きよつて……決めたじや無い……もう忘れ……」

そこで、神楽は崩れるよう意識を失った。全てを吐き捨てて迄云いたかつた事はもう言葉として出ては来なかつた。降り続ける雨が神楽の熱を奪い取つて行つたかのように……その様子を見ていた朔夜は駆け寄つた。

「ふはははは……云いたい事はそれだけか？どこまでも甘いんだよ。

姉さんは！」

再び樹木を呼び起した雅樹は宙に舞つた。また、一段と人格が変わつてしまつたかのようで……雅樹今度はドンドンと空高くその樹水の蔓を伸ばして行つた。

「賭けは引き分けと云う事にしておきましょつか？都往朔夜！次逢うのはいつになるかわからないが、お前がキヨウと関係がある限りは、またいずれ何処かで逢うだろうよ！勿論、敵としてな！既に別件で運命の輪は回り始めている……」

意味の分からぬ捨て台詞を吐きながら、暗雲立ち籠める空の方へと雅樹は去つて行つたのである。

ハピローグ

賭けは、雅樹が云つた通り引き分けになり、その後、下北沢近辺での事件は起こらなくなつた。そして、今迄存在していた、裏ホームページも消えてしまつてゐる。捜査の手が回る前には、今回の一件は闇に葬られたのである。

あの後、神楽を抱え一富和和恵の部屋に戻つた朔夜は、直紀の指揮の下、一富和和恵の自我を取り戻す為の夢交換を終え無事意識を取り戻した。

しかし、肝心の神楽の熱は三日間続いた。術を操つた雅樹の為の人柱のせいなのか、過労気味だつた上に雨に打たれたからなのだろうか、その辺りは全く分からなかつた。原因不明の昏睡状態である。そして、熱の山を充分越えた今になつても神楽が目覚めることは決して無かつた。

しかし、神楽の身は父の酷慮で、秋元総合病院に今は入院と云つ形で生き長らえている。

その事で、朔夜は叶に頼んで、病室に呪除返しを行つ為に結界を張つてもらつた。これで、もし雅樹が術を行つても人柱としての神楽の身に害は及ばないであらう。逆に、術者にその反動が返される事となり、無闇な術は行えないであらうと氣休めながら安心している。それからと云つもの、朔夜は叶の再入院の手続きを終えてから、というものの欠かさず叶の見舞いの合間に時々神楽の顔を見に行つていた。

その神楽の意識は、心の闇の奥底に在り、殻を被つたまま表にして来ようとしている。朔夜の力によつての占夢も効果は全く無かつた。そう、自我を取り戻す為の努力も虚しいものであつた。

ただ、今回件で分かつた事は、神楽が眠つた状態になると、雅

樹の力が増し、人格さえ変わってしまうと云つ事だつた。この双児の力は想像するには難し過ぎて、朔夜も叶も、さじを投げるしか無かつた。

昏睡状態の神楽が次いつ目覚めるのか……雑樹との賭けが終わつた今でも気にかかる。今の現状だと、この地上の何処かで呪組返しを施しているのも知らずに雅樹が大きな事件を起していても不思議では無い。いや、もしかすると、神楽に掛けた呪組返しの事に勘付いているかも知れない。そして、敢えて何処かに潜伏して来るべき時を見計らつているかも知れない。全く油断はならないのである。

そしてあの日の事は、マスコミ関係には報じてはいない。警察官もあの現状を理論上あり得ないと判断していた為である。テレビの中の超常現象と曰されての番組の一コマのよつだとしか把握していない。その中で直紀と叶は、この事實を知る第三者であり、最近はよく朔夜や叶の前に姿を現すようになつてはいるが深入りしないようにしている。知つたところでどうにかなるかと云われると、全く持つでどうにも動かす事は出来ない。蛇の道は蛇。そう考える事にしたらしき。

「叶？ 神楽さんはいつ目覚めるのでしょうか？」

それが、今では合い言葉になつてゐる。

「さあなあ～神のみぞ知るつてやつとちやうか？」

叶も、一ヶ月を過ぎる今では完全に骨が引っ付き、リハビリの最中である。そんな叶に、かえでがしそつちゅうつちつて来て、『映画』と唸つてゐるらしい。誕生日プレゼントの映画の最終日が近くなつてゐるのである。

「眠り姫を起すのは、昔から王子様つて相場が決まつとる。試してみてはどうや？」

『冗談交えに叶はそんな事を云つてみせる。それが朔夜へのいたわりだと分かるから朔夜は笑つてみせた。

「そう出来る資格は僕には有りませんよ…………」

夢を見ないと云つ問題を抱える叶の事。今回引き分けだと云つ言葉と、叶に關係有るらしい意味ありげな言葉を置き土産に残して去つて行つた雅樹が、これから先に起すかも知れない厄介な事。山積みにされていくこれらの問題。それらを考えると今の自分をもつと揺るぎないモノにしなければならないとそう思つ。

そしていつの日か、神楽自身が起きあがれる事を願いながら朔廠は今を生きている……

#1-1 ハローライフ（後書き）

1月で読んでいただきありがとうございました。
まだ、これから参の巻をひらしていく事になりますが、お付き合い
頂けると大変嬉しいです。
感謝の言葉で一杯。ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6477d/>

占夢者人の夢～弐ノ巻・後編～

2010年10月8日15時56分発行